

縄紋時代中期後葉 連弧文土器の研究－その系譜と展開－

① 論文の主題(テーマ)、当該研究分野における位置づけ

本研究は、縄紋時代中期後葉の連弧文土器について、①定量的分析を用いてその型式学的特徴を明らかにする、②その系譜について考察する、③出現期から衰退期に至るまでの展開の様相を明らかにする、の3点を踏まえて、連弧文土器が縄紋土器編年においてどのように位置づけられるか考察し、独立した土器型式として認めるべきかを検討するものである。

縄紋時代の土器は年代と地域で分類され、それぞれの時代、地域において代表的な土器が存在しており、それが「土器型式」として設定されている。土器型式を時間と地域別に網の目の如く並べたものが土器編年である。ところが実際には、ひとつの地域にひとつの土器型式が存在するということではなく、ある時期のある遺跡には、複数の系統の土器が共存することがむしろ通常の状態であることが明らかになってきている。つまり従来の土器型式の概念には収まりきれない土器群が多く存在しており、このような土器型式として認められていない土器群をどのように位置づけるのか問題となっている。

本研究で取り上げた連弧文土器は、縄紋時代中期後葉に、甲信地域を分布の中心とする曾利式土器の文化圏と関東を分布の中心とする加曽利E式土器の文化圏の交わる地域に突如として出現した土器とされている。型式学的特徴は、一般に口縁部が外反もしくは内湾し、胴部が括れる器形の深鉢で、口縁部と頸部に区画をもち、口縁部と胴部の双方もしくは片方に、弧線文あるいは波状文が施される土器である。連弧文土器は、遺跡から単独で出土することはなく、曾利式土器、加曽利E式土器と共伴することが通常であり、独立した土器型式としては認められていないが、型式として認めるべきとの見解もある。系譜問題についても未だ一致した見解があるとは言い難い。本研究では、連弧文土器を取り上げてその性格を詳細に分析したうえで、系譜と展開について考察し、縄紋社会における連弧文土器の位置づけについて考察したうえで、土器型式として認めるべきか検討した結果、「連弧文式土器」として型式設定すべきである、という結論に達した。

② 論文の構成

〈目次〉

序章 本研究の目的と方法

第1章 連弧文土器の研究史 一系譜と変遷に関する議論を中心に－

はじめに

1. 第1期：1940年『日本先史土器図譜』以降1960年代まで
2. 第2期：1970年以降1990年代前半まで
3. 第3期：1990年代後半以降現在まで

おわりに

第2章 連弧文土器の編年的考察－文様要素を中心にして－

はじめに

第1節 分析の方法

第2節 分析

- (1) 口縁部区画の文様要素と地紋の組み合わせ
- (2) 地紋と口縁部区画の文様要素の組み合わせ
- (3) 口縁部区画の文様要素と頸部区画の文様要素の組み合わせ
- (4) 口縁部区画の文様要素と弧の単位数の組み合わせ
- (5) 地紋と弧の単位数の組み合わせ
- (6) 口縁部区画の文様要素と弧のタイプの組み合わせ
- (7) 地紋と弧のタイプの組み合わせ
- (8) まとめ

第3節 編年的考察

第4節 まとめと展望

おわりに

第3章 南西関東における連弧文土器の文様割付

はじめに

第1節 文様割付復元の研究史

第2節 対象資料と方法

第3節 分析

- (1) 口縁部の弧の単位数について
- (2) 胴部の弧の単位数について
- (3) 口縁部と胴部の弧の単位数の関係
- (4) 口径と口縁部の弧の単位数との相関関係
- (5) 頸部径と胴部の弧の単位数との相関関係
- (6) 口縁部と胴部の弧について
- (7) 沈線の本数と単位数、沈線幅・器厚について
- (8) 最終角度のズレ
- (9) 弧のゆらぎについて

第4節 まとめと考察

- (1) 連弧文土器の割付について

(2) 連弧文土器の地域性について

おわりに

第4章 周辺地域における連弧文土器の文様割付

はじめに

第1節 連弧文土器の内訳

第2節 分析

- (1) 口縁部の弧の単位数について
- (2) 胴部の弧の単位数について
- (3) 口縁部と胴部の弧の単位数の関係
- (4) 口径と口縁部の弧の単位数との相関関係
- (5) 頸部径と胴部の弧の単位数との相関関係
- (6) 口縁部と胴部の弧について
- (7) 沈線の本数と単位数、沈線幅・器厚について
- (8) 最終角度のズレ
- (9) 弧のゆらぎについて

第3節 考察

- (1) 荒川中流域右岸の様相
- (2) 北武蔵地域の様相
- (3) 両総地域の様相
- (4) まとめ

おわりに

第5章 連弧文土器の出現と展開

はじめに

第1節 連弧文土器の出現について

- (1) 連弧文土器の系譜に関する研究史
- (2) 曾利式土器の研究者からみた連弧文土器
- (3) 甲斐地域における出現期の連弧文土器
- (4) 南西関東における出現期の連弧文土器
- (5) 山根坂上 D15 号住における出現期の連弧文土器について
- (6) 出現期の連弧文土器に関する考察

小結

第2節 連弧文土器の分布範囲

- (1) 北関東東部への伝播(茨城・栃木)
- (2) 南東北への伝播(福島・宮城)
- (3) 北関東西部への伝播(群馬)
- (4) 信州(北信・中信・南信)への伝播

(5) 東海地域への伝播

(6) 甲州地域との関係

おわりに

第6章 まとめと展望

はじめに

第1節 連弧文土器の成立と展開

(1) 出現期の連弧文土器

(2) 盛行期の連弧文土器

(3) 変容期の連弧文土器

第2節 連弧文土器とは何か

(1) 山内清男の縄紋土器型式論に対する再検討

(2) 連弧文土器とは何か

(3) 連弧文土器の型式設定

おわりに

〈各章の概要〉

第1章では、連弧文土器に関する先行研究について、主に系譜問題の認識によって時期を第1期から第3期に分けて整理した。第1期は連弧文土器の発見から加曽利E式土器の範疇で編年されていた時代、第2期は、資料の増加に伴い「連弧文土器」という呼称が定着し、西日本にルーツを求める広域伝播説が盛んに論じられた時期、第3期を連弧文土器の成立に曾利縄紋系土器が関わっているという見解が示されてから現在までとした。問題点として、系譜問題で未だに統一見解があるとは言えない状況であること、土器型式として認められるのかという問題が棚上げされた状態であることを指摘した。

第2章では、連弧文土器を分析するための手段として「文様割付の研究」で小林が用いる計測手法(小林 2000b など)を使って模式図を作成した。その際に取得した文様要素のデータから、セリエーション手法を用いて数量的分析をおこない、連弧文土器の変遷を明らかにした。その結果を基に、連弧文土器の変遷について5期に分けて編年的考察をおこなった。結果は、従来の編年と概ね一致したものであったが、数量データに裏付けられた編年となった。

第3章では、連弧文土器の型式学的特徴を明らかにする目的で、連弧文土器301個体の「文様割付の計測」をおこない、模式図を作成した。その計測データを用いて、主に連弧文土器のアイデンティティといえる弧の施文について統計学的分析をおこない、弧の施文の正確性について検討した。連弧文土器の中心地とみなされる南西関東を、相模野台地・多摩丘陵・鶴見川流域・武蔵野台地の4つの地域に分けて分析をおこなった結果、連弧文

土器の時期差・地域差が明確になり、相模野台地で最も時期が古く、弧も比較的正確に施文されており、典型的とされる連弧文土器を作っていることを指摘した。そして時期が新しくなるにつれて中心地が東に向かって移動していることを確認した。

第 4 章では南西関東の中心地域に加えて、荒川中流域右岸、北武蔵地域、両総地域、その他地域の連弧文土器 245 個体の「文様割付の計測」をおこない、模式図を作成した。合わせて連弧文土器 546 個体の計測データを用いて全地域の分析をおこない、各地域間の比較検討をおこなった結果、北武蔵地域は多摩丘陵からの伝播を、両総地域へは武蔵野台地からの伝播を指摘した。両総地域では、共伴する加曽利 E 式土器の画期に合わせて、連弧文土器は磨消縄紋の技法を取り入れて適応していることを確認した。

第 5 章第 1 節では、連弧文土器の系譜問題について考察した。これまで出現期の連弧文土器は、多摩川上流域の羽村市山根坂上遺跡の連弧文土器であると認識されていたが、それよりも確実に古い、最古段階の連弧文土器を上野原市狐原遺跡で確認した。そこで、この狐原遺跡の連弧文土器をミッシング・リンクとして捉えて、甲斐地域の曽利縄紋系土器の影響を受けて誕生した連弧文土器が狐原遺跡を経由して、山根坂上遺跡の連弧文土器へと繋がり、南西関東に伝播していくと論じた。さらに、甲斐地域から桂川・相模川を経由して相模野台地へと伝播していく別ルートがある可能性を指摘した。

第 2 節では連弧文土器の分布範囲について確認した。その結果、両総地域で確認した「千葉型連弧文土器」(戸田 2010)が、南東北まで伝播していることを明らかにした。

第 6 章では、第 1 節で連弧文土器の変遷を出現期、盛行期、衰退期にわけて再確認した。

第 2 節では、連弧文土器の性格を明らかにしたうえで、山内清男の土器型式論とその再検討の研究史を確認した。南西関東を中心とした遺跡で、曽利式、加曽利 E 式土器と共に連弧文土器が受け入れられ、それぞれの地域で適応している有様をみると、縄紋中期の社会は決して閉鎖的なものではなく、多様性を認める柔軟性をもった社会であり、集落間の交易や交流による人の移動の自由性も高かったであろうと結論づけた。最後に、連弧文土器は型式として成り立つのか検討した。その結果、山内清男の設定した土器型式としては当てはまらないものの、共伴する曽利・加曽利 E 式土器とは系統を異にする土器群であること、甲斐地域から南東北までダイナミックに移動していることを確認したことから、系統型式として設定すべきであると結論づけて、標識遺跡の設定はせずに、型式名として現在使われている連弧文土器から「連弧文式土器」を提唱した。